

関西学院大(西宮市)の社会学部教授の金菱清さん(47)は、東北学院大(仙台市)の教員時代、東日本大震災の被災地で「震災の記録プロジェクト」として学生と社会調査を約10年間、続けてきた。「震災と幽霊」というテーマで注目を集めたこともある。その実績をもとに風化が懸念される阪神・淡路大震災の調査にどう取り組んでいくのか。その思いを聞いた。(聞き手・高部真一)

東日本大震災に関しては最初、被災者71人の手記を集めて、「3・11 慟哭の記録」(新曜社刊)としてまとめました。当初、被災者の話を聞き取ろうとしました。しかし、発生半年で人間関係もできていない中で聞き取りをすまとめるのは不可能だと考えました。言葉はこねていないかもしれないが、当事者自身が体験をつづけたほうがいいと。

僕は自身は約1000年ぶりの災害をきちんと記録に残すことが目的だったんですが、当事者にとっては別の意味を持っていました。息子さんを亡くされたお父さんは「息子と一緒に書いていた気持ちになった」と言っています。多くの人が本を抱きしめたり、大切に仏壇に置いたりしてくれています。

「震災と幽霊の研究が話題になりました。ゼミの女子学生の一人が宮城県石巻市に通い詰め、多くのタクシードライバーが幽霊に乗せたという証言を集めました。幽霊は真夏に季節外れのコートを着た30歳代ぐらいの女性やマフラーやブーツ姿の小学生の女の子らで、会話を交わすのがいつの間にかなくなってしまうという話です。運転手はメーターを「実車」に切り替え、無賃乗車となる未収金を自腹で払っており、リアリティーが

ありました。普通、幽霊という「怖い」「呪う」とか負のイメージが強いのですが、最初は驚いていた運転手たちは「この世に未練がありながら多くの人が亡くなった。幽霊になって出てもおかしくないか」との気持ちになり、「また遭遇しても乗せる」と言っています。現れるのを待ち望んでいて、身近な知り合いみたいな感じになっていくんです。死生観にかかわり、興味深いです。他の災害との比較もしたいテーマです。

海外からも取材が相次ぎ、ネットフリックスのドキュメンタリー「波にさらわれた魂」にもなりました。東日本大震災の特徴として「あいまいな喪失」があるということですが。行方不明の方が今も約2500人います。通常なら亡くなったら、別れを告げ、お葬式という明確な喪失になるんですけど、区切りのないあいまいな死とも言えます。「もしかしら帰ってくるかも」という思いは残り、当事者が納得できるまでは、あいまいにしておくのがいいのかもしれない。

調査の主体はゼミの個人的には初めての経験でも、社会的には記録として蓄積されていると、人の死への対応や、復興への取り組みへのヒントになり、いい方向に進めることができます。災害に遭遇した際、

「これまでの研究は10冊の本になっています。記録する意味は。日本に生まれたからには、災害とは宿命的につきあっているから、忘れずにまっかもしれないという不

二つの「震災」記録する使命

「阪神」の証言学生と発掘

「2年前に母校の関西学院大に教授として戻ってきました。やはり阪神・淡路大震災の研究を進めるんですね。」

阪神・淡路大震災はタイムラグがものすごく、今の学生にリアリティーを感じてもらおうのに苦労しています。彼ら彼女らにとって生まれる前のことで、戦争と一緒に区別がつかない。震災をテーマにしたゼミも人気がなく、軌道に乗せるまで時間がかかるかもしれない。

「今どんな調査をしているんですか。震災発生から27年たつていても、小さな声をすくうことができる。今の4年生には「震災の記憶」というテーマを与えています。学生の一人がカフェの女性店

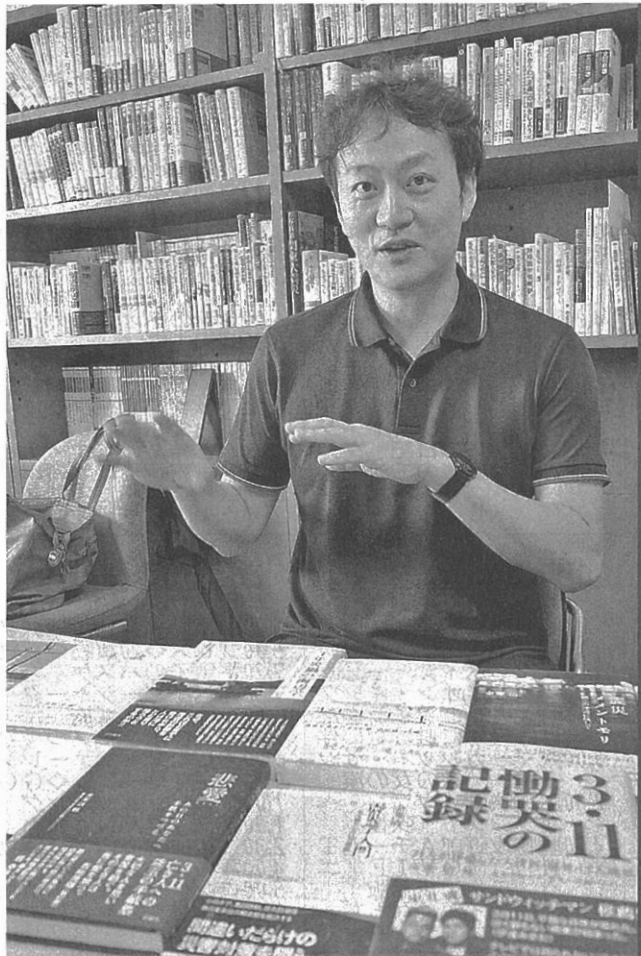
長がすくく心にひっかかっていることがあると聞き出してきました。それは当時、水が出ないこともあり、店を訪れた見知らぬ被災者にトイレを貸さなかったこと。他人から見れば、ささいなことかもしれませんが、これまで誰にも話してこなかったんです。記憶は年月がたつほど消えていくのではなく、化石みたいに固まっています。ハンマーとタガネを使って掘り、最後に刷毛で丁寧に砂を取り去った時に初めて出てくるような記憶を学生が見つけたんです。3年生のテーマは「五感と阪神・淡路大震災」。30年近くたつて記憶に残っているのは手足の感覚でしょうか。味やおいしさもありません。どんな証言が出てくるか。学生に期待しています。

「自身、二つの大きな震災を体験しました。大阪府池田市に住んでいた阪神の時は大学受験で、「こんな時に受験してもいいのか」と思いながら被災地を通って西宮の試験会場に向かいました。東日本の時はマンションにいて建物が倒れるんじゃないかと思いました。2回経験したのは偶然なんですけど、「あなた、これやりなさい」と与えられた試験だと考えています。二つの震災を記録する。課された試験に自分なりに答えを出すつもりです。

文化、スポーツ、経済、地方自治、研究、NGOなどの各分野の一線活躍するエキスパートにじっくりと話を聞きます。随時掲載します。



阪神・淡路大震災直後、関西学院大の試験会場に向かう受験生ら。金菱さんもこの年に受験した。今の学生にとって生まれる前の出来事で、風化をどう防ぐか問われている。



関西学院大社会学部教授 金菱清さん 47

1975年生まれ。専門は災害社会学、環境社会学。東北学院大の准教授、教授時代にはゼミ生と東日本大震災の遺族の見た夢を調査、「私の夢まで、会いに来てくれた」を出版した。宝塚市在住。

「インタビューひょうご」のご感想をお寄せください。阪神支局Eメール(hanshin@yomiuri.com) かファクス(07988・23・2220)へ。